
ひこうき雲

千駄山ロッカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひこうき雲

【Nコード】

N6866F

【作者名】

千駄山ロツカ

【あらすじ】

ギンギラギンの太陽、ひこうき雲。真夏の海水浴場で泳ぐ二十歳の善行に、子供の頃の思い出がよぎる。

のし

二十歳の小野寺善行は、海水浴の真つ最中だ。
海辺の町で育ったせいで水泳が得意な善行は、調子に乗り過ぎたのかもしれない。

始めから、へっぴり腰だった江守友和は、えもり・ともかずすぐに引き返した。
善行は、ちょっと後悔している。

この辺りまで来ると、うねる波のせいで、水の中のそちここに浮かんでいる人々が、ほとんど確認できなくなる。

すぐ傍で、誰かが泳いでいた筈のだが、波間に浮かぶ善行の視線からは、まったく見えなくなった。

（馬鹿な事をしちまった。こんなところまで来るんじゃないかった）

本当に地球とは水の惑星なのだと、今更ながら実感する。

見事な球体の表面に、海と呼ばれる大量の液体がへばりついていて、その液体は表面張力がみなぎっているのだ。

目の前はどこもかしこも海水の固まりではないか。

まあ、これは、あたりまえの事なのだが。

大いなる液体と気体の狭間に、ちっばけな善行は漂っている。
確認できるものは、自分自身の手足のみ。

——タッポン。タッポン。

独特の音をたてて波がうねる。

（ああ、海は広いな大きいなってか）

（いいところ見せようとして、頑張りすぎちゃったな）

立ち泳ぎで精一杯伸び上がって見た。
波間に漂う人の頭が、いくつかみえた。

（そうだ。そんなに沖へ出た訳じゃない）

浜辺では友和が、先刻知り合ったばかりの、おねいちゃんの二人
連れと一緒に、こっちを見ている。

だけど三人は、踵を返して浜茶屋の方へ歩いて行くじゃないか。

（くそつ、友和め！ 薄情者め！ 早く帰らなくっちゃ）

善行は横泳ぎで砂浜へ向かって泳ぎ出した。

「松葉崩し」と同じ恰好の「横泳ぎ」は、何となくウププな感じが
する。

例によつて右手が「ギター爪」の善行は、右腹を下にした「松葉
崩し」の時と同じ恰好の横泳ぎだ。

まあ、横泳ぎとギター爪は、なんの関係もないのだが。

とにかく横泳ぎは楽でいい。疲れてきたら、真夏の鮮やかな青空
を見ながら、仰向け気味になって、ほにやらほにやらと泳げばいい
のだ。

空を見ながら泳いでいると、一筋のひこうき雲が見えた。

その時、善行の頭の中のステレオのスイッチが入った。

荒井由実の曲『ひこうき雲』が鳴り出した。

この曲は本当に、ガツンと来た曲だった。

実際、この曲を聞く度に、周りの奴らにはれないように、こっそ
り泣いたりした。

一年ぶりで復学した善行の、最近の飲み仲間である学友達は、何
故だか、ロック好きにしても、フォーク好きにしても、アンチ荒井

由実が多いからだ。

「生意気そうで、鼻持ちならぬ
と言うのだ。」

「ブスで悪声だ」
とも言つ。

（まあ、確かに、アイドルのように可愛くはないにしても、ちょっと酷いんじゃない？）
と思う。

しかし、こんな状態でのこの曲、『ひこうき雲』は、何だかちょっと、ヤバイ感じもする。

善行の頭を思い出がよぎる。

死んだ子供

小学四年の夏休み明けに二ヶ月間、俺は肝炎で入院した。当初は6人部屋にいた。

皆同じ時期に、同じ症状で入院した、同じ小学校の奴らだ。いつも一緒に海水浴に行って遊んだ奴もいる。

だから入院生活は、それなりに楽しくワイワイやっていた。

まるで臨海学校のような小児科病棟の6人部屋には、五年生のずいぶんデカくて、大人っぽい顔になった女子もいた。

この娘は鼓笛隊で、ベルリラを叩いていた。

鉄琴にバーをつけたこの楽器はけっこう重い。

だから体格の良い女子が担当する。

五、六年になると急成長する女子が何割かいる。

この娘も急に大きくなって、力も強くなったので鼻息も荒く、よく同じクラスの、まだ可愛らしい顔をした男子を、いたぶっていた。教室の中で、追い詰められた男子が悲鳴をあげる。

「やめろよー！」

彼女は妖しく笑う。

「うふふふ。だーめよー！」

廊下を通る度に目撃した俺達は、毎度ウププと笑った。

ベルリラは、ベルトを肩に掛け、下腹部にバーを当てがった恰好で行進するのだが、この娘は何故だか、いつもバーが股間の所に行ってしまうって、いや、はつきり言おう、モロにアソコの部分に食い込んでいるのだ。

他の女子の場合は、へそと股間の間（へそ下二寸。といったところか？）とか、太ももの、左右どっちかの付け根の脇とか、上手い具合に、キワドク逃がっている。

大太鼓の奴に、

「なんで先生は、注意して治してやんねのかな？」
と言うと。

「先生も恥んずかすくて言えねのすう」

と言った。

先生はシャイな、若い男性であつた。

だから全員が、見てみぬふりを続けた。

俺はその、食い込んでいる部分の様子が、どうにも気になってし
ようがなかった。

小太鼓を叩きながらも彼女の股間に、いつも目線が行ってしまっ
て、困ってしまった。

今年の夏休みは、市民祭でのパレードの練習の為に、鼓笛隊のメ
ンバー達は、せつかくの夏休みの貴重な休日を、何日も返上してい
た。

そして、夏休みの最終日の三日前が本番、つまり市民祭の当日で
あつた。

ところで、この辺りの海開きは遅く、七月も十五日過ぎの頃なの
だ。

しかも、喜び勇んで出かけて行っても、海水に足を入れた瞬間、
全身が縮み上がってしまい、結局、泳がずに帰ってくる事もあつた。
水温が低すぎるからだ。

だから、水温が上がった八月も半ば頃には、七月中の悔しさを取
り戻す為に毎日、意地でも海水浴に行くのだ。

もっともその頃になると、土地の人間は「盆波」と呼んでいるの
だが、海は荒れ始めている。

それでも行く。

毎日泳ぐ。

まあ、本当の理由は、ウニやアワビを密猟に行くのである。

ちよつと南へ行くと「北限の海女」つてのがいた。

しかし更に北にも海女はいた。

そちらの方は「さいはての海女」とでも命名するつもりなのか？

そんな土地柄なのだ。

大人の本格的な密猟には、目を光らしている漁協なのだが、まあ、ガキの場合は、おおむね見逃してくれた。

だからこの辺りのガキ共は皆、泳ぎが達者だ。

河童なのである。

だが、去年もおとしも、毎年そうなのだが、夏休み明けの始業式の校長の挨拶と訓辞は、夏休み中に溺れて死んだ児童の、追悼から始まるのだ。

全校生徒の中、毎年一人か二人が、必ず死んでいた。

溺れると言っても、死因は皆、決まって心臓麻痺なのだ。

暖流と寒流の交わる、ここいらの海辺では、浮袋につかまっていなくても、ほんのちよつと沖の方へ流されたり、深みの方へ行っただけでも、冷水の「溜まり」があつて、急激な温度差に心臓が耐え兼ねて、その結果、ドザエモンとなるのだ。

だから、ここいらの浜の河童共は、この事を、

「アップを喰らう」

と、事も無げに言つてのける。

「三組の田中ヤスオなあ、グンカン岩の先んここでアップ喰らつたよ」

「ヤスオは達者な奴だったべよ」

「ブイのちよこつと先で、カゼ（ウニ）取つてたんだと」

「運がねえなあ」

「浮袋さ、つかまつたまんま、黒浜の方まで流されて、漂つてたんだと」

「死んだまんまか？」

これが去年の、夏休み明けの挨拶だった。

今年は、夏休み中に駆り出されて行われた、鼓笛隊のパレードが引き金となって、何人かがこの、嘔吐と発熱の症状で入院した。

だからこの時点で俺は、今年のドザエモンは誰なのか、まだ知らなかった。

入院から一週間たった頃、俺だけが他の病室に移された。

症状も同じなのに、今でもその時の説明が、よく解らないのだ。

後年、その事を他人に話しても、皆、よく解らないと言う。

とにかく、医者は確かに言ったのだ。

皆は「流行性肝炎」なのだが、俺は「慢性肝炎」なのだと。

だから、別の部屋に移すとの事だった。

そして、更にこう言った。

「おめは、おつきぐなっても、酒っこは絶対、飲んだら駄目だど」
後になって、いわゆるC型肝炎の事なのかと考え、血液検査をした際に聞いてみたのだが、違っていた。

長じた俺は、「酒っこ」を盛大に飲んでいるのだが、どうという事もない。

移った病室は2人部屋で、当然、先客がいた。

他の小学校の3年生の男子だった。

難しい病名の子供で、めつきり温和しい奴だった。

小さい時からずっと身体が弱く、入院を繰り返しているという。
だから、海水浴なんかも、行った事がないと言う。

「おめ、もつと丈夫になんねば、海さ行っても、アップ喰らっちゃま
うど」

と言うと、

「それでも、ワア（我。つまり僕）も、行ってみたい」

と、大きな目をくりくりさせて言った。

本当に元気が無い奴だった。

何度となく真っ青な顔になり、その度に、医者と看護婦が駆けつけてきて、「ついたて」が出され、その向こうで治療が行われていた。

毎回こちらは、いい気持ちじゃないのだが、翌日は案外、ケロッツとしているのだ。

入院生活が長いせいなのだろう、お見舞いで貰ったリンゴや梨の皮を、ナイフで器用に、大人のようにすると剥いては、俺に分けてくれた。

だが、いつも食欲が無い奴だった。

だから、

「おめ、もっと食わねばダメだど」

などと言いつつ、ほとんど俺が食っていた事になる。

物を貰っから言うのではないが、本当に優しい子供だった。

俺は看護婦に命じられていた。

夜分、その子の気分が悪くなったら、すぐに非常呼び出しボタンを押すようにと。

「小野寺君はお兄ちゃんなんだから、しっかり面倒見てあげてね」

しかし退屈した俺は、毎日6人部屋へ遊びに行つては、検温と注射の時間だけ戻ってくる有様で、トランプ遊びなんか熱中しては、夜に及ぶ事もしばしばで、その度に、看護婦に怒られていた。

ある夜、いつも青白かったその子が、更に真っ青になって、息も苦しそだったので、俺は非常呼び出しボタンを押した。

ボタンを押すのは、これが初めてではなかった。

すぐに医者と看護婦が駆けつけてきた。しかし、いつもの「ついたて」は出されず、その子は、集中治療室へ運ばれて行った。

そして、そのまま帰ってこなかった。

次の日、その子の母親がきて、荷物を持って行った。母親は俺に、何度もお辞儀をして、お礼を言った。泣いていた。

二人部屋の、その子のベッドは空になった。俺が退院するまで、ずっとそのままだった。

その後、6人部屋の奴らは、相次いで退院して行った。

一人になった病室の中で、俺は「死」というものについて、生まれて初めて考え込んでしまった。

これほど身近に経験した「死」は、かつて無かったからだ。

俺は、吐き気がぶり返して、発熱した。

症状が戻ってきたのだ。

だから結局、俺は6人部屋の奴らより、一月後れて退院する事となった。

忘れないよ

浜を目指して泳いでいる善行の足に、何かがピタピタと触れた。

「うわ！　なんだ？　勘弁してくれ！　あの子は、ひこつき雲になったんじゃないのか！　そう言えば、海に行きたいって言ってたっけ」

善行はクロールとなり、夢中で泳ぐ。

少しでも急ぎたいからなのだが、密漁ばかりしていた善行は、正式な泳ぎは下手くそなのだ。

「のし」と呼ばれる横泳ぎと、立ち泳ぎと、素潜りばかりがやたらと上手い。

だがこれはスピードが出ない。

だから下手くそでもクロールで泳ぐ。

しかし、不慣れなクロールは息切れがするばかりで、やたらと気ばかりが焦る。

またしても足に、ピタピタと触ってくるではないか。

「うわあ！　本当に！　勘弁してくれ！　名前なんつったっけ？

ああ、思い出せない。確か、柳がついてたな。猫柳。んなわきや、ないだろ！　じゃ、鬼柳。あ！　そうだ。鬼柳くん。あいつは、あの年のドザエモンだった。隣のクラスの奴だ。見舞いに来てくれた女の子に聞いて、知ったんだっけ。どっちにしても、嫌な事を思い出しちゃった。ひえ！　また触った。鬼柳くん、君か？　それとも他のドザエモンか？　五年の時の中村君。こいつは同じクラスで、友達だった。中村君。な、助けてくれ！　二年の時は、……一年生の浅田民夫ちゃん。近所の子供だった。そして、一年生の時は、……これは上級生の誰かさん！　名前なんか、知るわきやないだろ！　あん時は、校長の長話で俺、貧血起こしてぶっ倒れたんだ。オモラシした子もいた。なんせ一年生だもんな。許してくれよ。後で名

前、ちゃんと調べるから。な。許してくれ。……三年生の時は田中ヤスオだ。三組の奴だ。な。ちゃんと覚えてるだろ！ な。な。六年の時は、やっぱり同じクラスの、大友次郎だ。おい、俺の同級生って頻度高いんじゃないか？ ……夏休みの真っ最中にクラス全員で葬式に行つたろ。大友、お前、マンガ上手かったな。成仏しろよ。実際、鳴海の辺りは土葬だつて聞いて驚いた。埋葬の時、土、一握り、放り込んでやつたろ。ああ！ また触った！ 死に方によつてちがうんだつて？ 本当かよ？ 水死だから土葬だつて、お前の姉ちゃんが言つてたぞ。……病死なら火葬だつてか？ 事故死は？ 焼死は？ うわ！ だんだん深みにハマっていくじゃないか。ヤバイよー！ 身体が、固まってきた感じ。格好つけてクロールなんかするからだ。助けてくれー！ 聞こえる訳ないな。……みんな、みんな、頼むから成仏してくれよ！」

子供のドザエモンの亡霊どもに、まわりつかれてずぶずぶと沈んで行く。

そんなイメージが、振り払つてても、振り払つても湧いてくる。

善行は必死に泳ぎ続ける。

もはやクロールの体を成してはいない。

苦し紛れの犬かきだ。

「あ！ 思い出した！ あの子の名は窪柳だ！ 窪柳慎二、つったんだ。慎二くん、頼むから成仏してくれ。うあ！ 足つつちゃった！ うわ！ うわ！ ……！ げぼげぼ。水飲んじまった！ ふわあ。もう駄目かもしれない。……なんて呆気ない人生なんだ！ こんなに温かい千葉の海で、アップ喰らっちゃうなんて……」

善行は、つった方の右足に、ますます、まわりついてくるのを感じた。

「そつだよな。窪柳慎二くんも、みんなも、きつと淋しかったんだ。解るよ。解つたから、もう勘弁してくれよー」

手だけで泳ぎ続ける善行は、もはや体力の限界を越えて、力尽きた。

「……沈む。……終わりだったか」

……と、なんと砂に、足がつくではないか。

「着いた。助かったあ！」

何歩か進んで、波打ち際にひっくり返った。

——ザザー！ ザザー！

と、寄せては返す波の音が心地よい。

まるで、いきなり現れたみたい、周りは、お兄ちゃんに、おねいちゃん、おばちゃんに、おじちゃん。とにかく人、人、人だけである。まさに芋洗い海水浴場ではないか。

太陽はギンギラギン。

浜の方から、焼きトウモロコシの匂いが漂ってくる。

ひっくり返ったまま、こむら返しの右足の親指を引っ張って揉んでいると、逆三角形のプロポーションも眩しい、ライフセーバーの兄さんが、駆け付けてきた。

「あんだ、大丈夫かい？」

と言った。

「いてて。つつちゃったよ」

と答えると、

「マッサージ、……やってやろうか？」

と、いかにも嫌そうな顔をして言った。

相手が綺麗なおねいちゃんだったら、いちいち聞かずに、すぐさま始めている。

そんな顔をしている。

「大丈夫。自分でやるから」

と言ってやると、ホッとした顔をして去って行った。

別のライフセーバーが拡声器で叫び始めた。

「本日はクラゲが大量発生してます！ 刺された人は遠慮なく申し

出て下さい」

善行は笑えなかった。

ドザエモンになった奴らは、皆、泳ぎの達者な河童だったのだ。河童が溺れたのだから、そりゃ、悔しかったに違いない。

悔しい想いを抱いて死んだ河童は、クラゲになるのかもしれない。と思った。

そうだ。優しく温かい海水の中を、どこまでも漂って行くがいい。そして、病院で死んだ窪柳慎二くんは、やっぱり『ひこうき雲』になったのだろう。

見上げるとひこうき雲は、まだ形を残していた。

ギンギラギンの太陽が眩しい。

サングラスを取りにいかなきゃ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6866f/>

ひこうき雲

2010年10月8日15時11分発行